

鹿大の チカラ

教育学部

金子 満 講師 (36)



金子満講師＝地域社会教育学
IIは、自身が教育学部の学生だった10年あまり前、海外からホームステイで来た学生と友達になつた。言葉は通じなかつたが、深く知り合うほど、食やことわざ、ものの考え方などに共通の「文脈」を感じた。「友達のことを、もっと知りたい」。その学生の母國が韓国だった。

韓国の人たちは生涯教育や社会教育にも熱心だという。日本統治下でも様々な葛藤の中で、暮らしを少しでも向上させようとしている「学び」の姿勢が農

満足いく答えができる。「自分は日本のことも、韓国のこと何も知らないんだな」と痛感した。その思いから、両国の歴史や韓国の近現代を研究する道に入った。

学びへの意識も躍動的



韓国の政治は、日本に比べ意思決定が速いといふ。「日本が石橋をたたいて渡るちみつな国だとしたら、韓国は思い切って途端、日本を背負わされた感じになり、戸惑った」。日本人がほんとうない地方の大学。ま

年代後半には小学3年生以降が必修。1、2年生にも試験的に広げられている。受験競争の過

熱や家計における教育費の増大といった問題も出ているが、金子講師は「粗さはあるが非常に躍動的に動いている国」と表現する。

韓國の人たちは生涯教育や社

会教育にも熱心だという。日本統治下でも様々な葛藤の中で、暮らしを少しでも向上させようとしている「学び」の姿勢が農

民たちに息づいていたことが、当時発行された文書から見えてくるところ。韓国の現代社会や日韓関係を読み解くうえでも、日本の統治下にあつた時代の研究は必要だ。だが、政治的に利用されかねない分野だけに、研究し表現することの難しさは常に感じているという。

「過去の」となんど、毎日もい」。そんな考えには異を唱える。「忘れてしまったこと、とからの国の誰かが政治的な意図で歴史を持ち出した場合、知らなければ思惑通りに操られてしまふ恐れがある。間違った情報で混乱させられるぐらいなら、

歴史の授業で、日・中・韓の3国で合同編集された教材が生徒たちに配られた＝2005年6月、韓国・ソウル市内の中学校で溝越賛撮影

共に学ぶべきだ。親や先祖の歴史として見つめ直さなければ歴史は絶対に位置づかない」。最近気がかりなのは激しい世相の変化だ。IT化が進み、日本でも動画サイトなどテレビを介さないメディアも登場。「だれもが見たドラマ」といった話題が減ってきた。同世代間でさえ、共感や共通認識を持ちにくく。価値観が多様化するなか、本音をぶつけ対立するよりも、その場の空気を読み、乱さないことを優先する傾向にある。

「言いたいことをはつきり言う」というイメージがある韓国でも、子どもたちに「本音ではない」傾向が見られるみたいになったといふ。

そんな時代だからこそ、「両国の人々が本音で議論し、手を取り合ひながら互いの価値観の違いを知り理解しあつてほしい」と願う。